

文藝春秋

# 文學界

bungakukai

三月号

●芥川賞受賞記念対談

川上弘美×小山田浩子「日常と幻想のあいだ」

●特別インタビュー

石原慎太郎「芥川賞と私のパラドクシカルな関係」

●対談

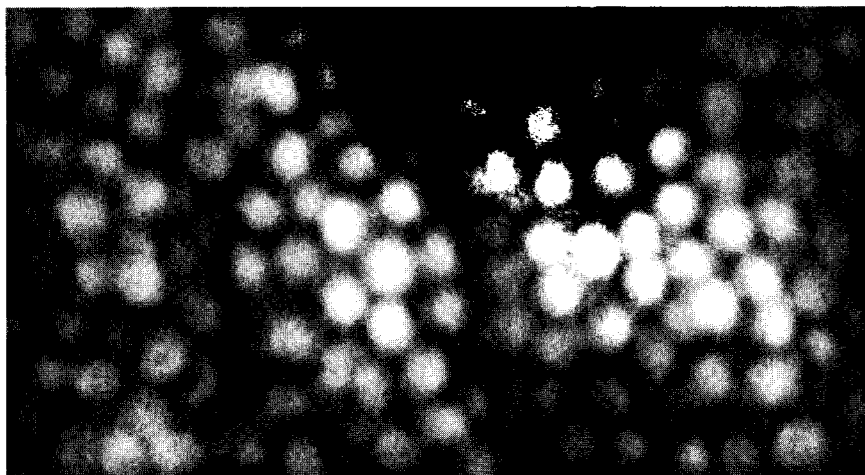
池澤夏樹×高樹のぶ子「男の小説、女の小説」

## 芥川賞一五〇回

### 記念特別号

●芥川賞一五〇回記念短編・エッセイ特集

- |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 小川洋子  | 阿部和重  | 伊藤たかみ | 絲山秋子  | 円城塔   | 大岡玲   |
| 河野多恵子 | 荻野アツナ | 奥泉光   | 鹿島田真希 | 川上未映子 |       |
| 黒井千次  | 黒田夏子  | 玄月    | 玄侑宗久  | 諏訪哲史  | 青来有一  |
| 島田雅彦  | 大道珠貴  | 田中慎弥  | 多和田葉子 | 辻仁成   | 中村文則  |
| 津村節子  | 長嶋有   | 南木佳士  | 西村賢太  | 花村萬月  | 平野啓一郎 |
| 堀江敏幸  | 藤沢周   | 藤野可織  | 辺見庸   | 又吉栄喜  | 村田喜代子 |
| 村上龍   | 松浦寿輝  | 三木卓   | 目取真俊  | 楊逸    | 吉田修一  |
| 山田詠美  | 吉田知子  | 吉村萬志  | 綿矢りさ  |       |       |



▼芥川賞150回記念 短編競作

# 火を恋う男

平野啓一郎

私はこの話のために、一つ穴を掘りました。そこに向かって何もかも喋ってしまつたら、土を被せて埋めてしまつつもりです。

そんなことをするくらいなら、最初から黙っておくがいい。――黙っていいんです、ずっと。しかし、「おぼしきこと言はぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける」という『天鏡』の「序」の文句は本当です。それで私も、「昔の人はもの言はまほしくなれば、穴を掘りては言ひ入れはべりけめ」というのに倣おうというわけです。

そう言えば、オウイデイウスの『変身物語』にも、アポロンにロバの耳に変えられたフリギア王の耳を見て、「地面に穴を掘り、自分が見たままの主人の様子を、小声で話し、掘った穴のなかへささるるまで、穴を閉ざすべし」と

ないほど働きました。夜になると、私のかわいい火に取り囲まれながら、束の間、至福の時を味わいました。それは私のささやかな人工楽園でした。

その日、私はいつものように、ライターやキャンドル、アルコール・ランプと様々な火に取り囲まれて、店の二階の白室で独り昼休みを過ごしていました。ズボンのベルトを外して、惚けたようになっていました。一時間になって、そろそろ店に戻ろうかと思っていた時、突然、ドスンと下から突き上げるような大きな衝撃を感じ、部屋はしばらくかなり揺れ続けました。

地震のない地方ですから、私は動揺しました。デスクに並べた火たちが、驚いて逃げ出してしまうのではないかと心配になりました。実際、奥に立てていたガスライターが一本、倒れて既にデスクを焦がし始めていました。私は、それを起こそうと腕を伸ばしました。

その瞬間、私が最も愛玩してきたあのアルコール・ランプの火が、我慢できなくなったように、私の腕に飛びかかってきたのです。いえ、火が悪いんじゃないや。私が、化粧のセーターを着ていたのが悪かったんです。あつという間に、私は火だるまになりました。それは、かつて経験したことのない激痛で、最初は火を引き離そうとしたり、服を脱ごうとしたりしていましたが、上手くいきません。無我夢中でドアに駆け寄りましたが、生憎と鍵をかけていたのを忘れていました。そこで、押したり引いたりしていた間に、右目をやら

れてしまいました。ようや、外に出られると、私は脱げかけたズボンの裾を踏んで、階段を転げ落ち、店の石畳の上でのたうち回りました。

私は消火器ではなく、鹽の水で火を消されたようです。激痛の中で、母の悲鳴が聞こえ、ああしろ、こうしろと、色々な人の叫び声が飛び交っていました。

私は、Ⅲ度の火傷が、体表の30パーセントにも及ぶ重傷でした。ついでに足を骨折していました。救急病院で医師が母にした説明は、かなり悲観的なものだったようです。しかし、私は一命を取り留めました。母は、私の将来を心配して、それから随分と病院を探したそうです。特に、顔の大部分をケロイドに覆われ、一生独身で過ごさねばならなくなることを心配していました。

私が転院した先の病院では、湿潤療法と呼ばれる、比較的新しい治療法が用いられていました。傷口を消毒したり、削ぎ落としたりすることなく、湿潤な状態を保ち続けることで、皮膚の再生を促す方法で、約一年半ほどかけて、火傷の痕は驚くほど目立たなくなりました。救急病院で告げられた皮膚移植をすることもありませんでした。

それでも、最初は目も当てられない姿でした。担当医はガーゼを用いず、患部に乾燥を防ぐ覆いを被せるだけでしたが、十日ほどかけて皮膚が白く壊死してゆき、それがドロドロと溶け出してゆく光景は、おぞましくグロテスクでした。私は、自分が何にともつかないまま、変身しつつあるということを

強く感じました。壊死した皮膚が取り除かれると、まるで少年の亀頭のように鮮やかなピンク色の肉芽が露わになりました。私は後に、死の淵から生還したと、人から随分と言われましたが、その肌を見てみると、やはり一度死に、再生した、という方が近い気がします。

今では私は、ごく普通の生活をしています。店は半年ほど休みましたが、その後は再開して、客足も戻りました。皆、私の火傷の痕が思いの外、目立たないことに驚きますが、そんな話をしていると、時折不意に沈黙が生じます。彼らは、私に尋ねたくて仕方がないので、言わば慎みから我慢しているのです。つまり、一体、何をしていた火傷したのかと。私は、リハビリ中の一年間、自分が恋に狂った挙げ句に何か別な存在に変身してしまう、ギリシア神話の登場人物にもなったような気分でした。しかし、思いがけず、日常はまた戻って来たのです。

あの時飛びかかってきた火。まだ死んでもいない私を、早まって炭化させようとした火。私がかすっかり信頼しきっていて、意のままに愛玩しているつもりだった火。……

ようやく落ち着いたある日、私は改めて、アルコール・ランプを買い求め、マッチを擦ってその先端に火を立たせました。

あの時、ほとんど人の大きさほどにまで膨れ上がって、私に縋りついてきた火は、何食わぬ様子でちゃんと輝いています。ひらひらと揺れる炎の先。小さく窄んだ尻。ぺろっと舌

でも出しているような明々としたその光。……何もかもが昔のままです。

私と火とは、あの時、結ばれました。そして、私はなぜか燃やし尽くされることになりました。私の風貌は、予想に反して、人間の女性にも、まだ愛されることを期待させる程度にまで恢復しました。

その上で、私はやはり、目の前の火を愛おしいと感じました。既に結ばれ、また結ばれることを恐れつつ夢見る私たちの関係は、より深まったのだと今では確信しています。

あれから随分と時が経って、私は近頃では地元のローカルテレビから取材をされたり、講演を依頼されたりするようになりました。

火傷の大怪我を克服して、人生を前向きに生きている人。私はそう見做されていて、実際その通りだと思えます。ただどうしても、そういう時には言わずに済ませてきたことが、腹の中に溜まりに溜まっているものだから、こうして穴でも掘って、みんな吐き出して、埋めてしまおうと思っているのです。

(了)

ひらの・けいいちろう ●1975年生まれ 99年「日蝕」で第12

0 回芥川賞、2009年『決壊』で芸術選奨文部科学大臣新人賞

同年「ドーン」でBunkamuraドゥマゴ文学賞「空白を満たしなさい」「ショパンを嗜む」「私とは何か——「個人」から「一人」へ」など著書多数。